SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

# Study of organization of subject curriculum in health and physical education : Examining problems using annual teaching plan and presenting ideas in curriculum organization



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2021-03-04<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 野津, 一浩, 片山, 径介, 石田, 達一郎, 齋藤, 剛<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.14945/00027918 |

# 保健体育科における教科カリキュラムの編成に関する研究

## －年間指導計画の問題点の検討及びカリキュラム編成の考え方の提示－

野津　一浩・片山　径介・石田　達一郎・齋藤　剛
（静岡大学学術院教育学領域，河津町立東小学校，浜松市立中郡中学校，静岡福祉大学子ども学部）

# Study of organization of subject curriculum in health and physical education

## : Examining problems using annual teaching plan and presenting ideas in curriculum organization

Nozu Kazuhiro , Katayama Keisuke , Ishida Tatsuichiro , Saito Tsuyoshi

**Abstract**

The study aims to present the concept of subject curriculum organization for the effective formulation and function of curriculum guidelines in health and physical education for elementary and junior high school in Japan.

First, the study investigated the actual contents of annual teaching plans, which is recognized as the subject curriculum for health and physical education for elementary and junior high school. However, the study was unable to determine the learning goals of exercise events or health items on the basis of annual teaching plans. As a result of the lack of clarity of the systematic nature of learning, the study considered that annual teaching plans did not play a role as a subject curriculum.

The study then examined the concept of subject curriculum organization to address the abovementioned problems. When interpreting the content of the curriculum guidelines, which are the bases of the curriculum, setting learning targets or “what to learn” was considered necessary.

By definition, learning targets are “values and characteristics of exercise” and “principles and concepts related to health and safety.” Their specific contents are systematically accumulated with a consideration of the developmental stage of the grade and are considered crucial to the formulation of curriculum guidelines.

A specific examination on curriculum organization was conducted through a relay race in the field of athletics. A curriculum organization was presented that pursued relay races over a period of nine in elementary and junior high schools. In addition, a specific examination of curriculum organization, which targeted the effects of smoking, drinking, and substance abuse on health was conducted. A curriculum was presented to deepen the understanding of health and safety principles and concepts over a six-year period in elementary and junior high schools.

By developing lesson practices based on a curriculum in which concretely extracted learning contents are systematically positioned, evaluating and improving learning contents according to appropriateness and the order in which they are taught are necessary.

In general, the abovementioned pointers are considered necessary activities to improve the curriculum in the hopes of realizing optimal curriculum management.

**キーワード：**　保健体育科　カリキュラム　年間指導計画　カリキュラム・マネジメント

### １．はじめに

#### （１）問題の所在

昨今のカリキュラム編成に関する意識の高まりは，小中一貫校への移行に対応する新しいカリキュラムの作成が求められていることが要因のひとつとなっている。それに加えて，改訂された学習指導要領（2017）に，各学校においてカリキュラム・マネジメントの推進が求められると提示されたことが大きな影響を及ぼしていると考えられる。

従来から，各教科における小中９年間を見通した系統性のある学びを意図した実践の重要性について言われている。しかしながら，体育科・保健体育科においては，系統的学習の実現に対応する具体的なカリキュラム編成について，十分な検討を行うことができているとは思われない。体育科・保健体育科のカリキュラムに相当するものとして認識されているのは，各学校で作成されている年間指導計画であろう。この年間指導計画は，運動領域・体育分野であれば，取り扱う運動や種目に関する単元名が記されているものである。また，保健領域・保健分野であれば，取り扱う保健の

内容項目に関する単元名が記されているものである。これらの年間指導計画からは，それぞれの運動種目や保健の内容を通して何を学ぶのかということは見えてこない。また，小学校から中学校までを貫いて同一の種目や保健の内容を取り扱うということは見えても，それぞれの学年で何を学び，どのように積み上げていくのかという縦への系統性を捉えることはできない。そのため，このような年間指導計画は，教科カリキュラムとして学習指導要領を効果的に機能させるというような役割を果たすことができるものなのか，ということについて見つめ直す必要があると考えられる。

学校教育におけるカリキュラムについては，学習指導要領解説総則編（2017）に，教育課程の意義の面から次のように示されている。

> 学校において編成する教育課程については，学校教育の目的や目標を達成するために，教育の内容を児童生徒の心身の発達に応じ，授業時数との関連において総合的に組織した各学校の教育計画である。各学校においては，法令で定められている教育の目的や目標などに基づき，児童生徒や学校・地域の実態に即し，学校教育全体や各教科等の指導を通して育成を目指す資質・能力を明確にすることや，各学校の教育目標を設定することが求められ，それらを実現するために必要な各教科等の教育の内容を，教科等横断的な視点をもちつつ，学年相互の関連を図りながら組織する必要がある。

以上から分かるように，教科カリキュラムは学習指導要領に基づいて「児童生徒や学校・地域の実態」「育成を目指す資質・能力」「教科等横断的な視点」等を考慮しながら，各学校において編成するものである。長尾（1989）が，学校教育のカリキュラムについて，学習指導要領を基準としながらも，様々な要因を加え，多くの視点からの検討を経たうえで，現実のカリキュラムになると述べているが，まずは学習指導要領に示されている内容の十分な解釈がなければ，様々な要因を加えて多くの視点から検討することは困難であろう。このことに関わって長尾（1989）は，その基準に基づきカリキュラムを編成しなければならないことから，学習指導要領は先生方によって，熟読玩味されるべきものと述べながら，ほとんど読まれていないのが実際のところであろうと指摘している。その実態は現在にも当てはまることが予想され，学習指導要領を読むのは研究授業等で学習指導案を作成するような時が主で，その際にも示されていることを授業計画に反映させるような読み方となっているのが実状ではないだろうか。どのような読み方をしなければならないのかというような観点から，学習指導要領をどのように読み込み，何を解釈していくのかということの検討を通して教科カリキュラムの編成を考える必要があるように思われる。

とりわけ，学習指導要領が新しく改訂されたことに伴い，各教科においてこれまでのカリキュラムの見直しを行い，新たなカリキュラムの開発が求められる状況にある。原（2005）は，学習指導要領改訂や新たな教育政策が出されるたびに，学校教育課程の作成，すなわちカリキュラム開発が必要となるとし，新たな教育の取り組みを行ううえで必要な教材を作成したり，より効果的に指導要領を機能させたりするためにも重要であると述べている。このようなタイミングを好機と捉えて，学習指導要領の内容を読み込むとともにその解釈を深めていこうとするような意識を高めたい。長尾（1989）は，学習指導要領の改訂期における関心の中心は，指導要領の変化，どこがどう変わるかに置かれるが，そういった指導要領の変化のなかで，指導要領とカリキュラム編成の基本的な関係，そもそも指導要領は，どのように実際に機能しているのか，指導要領は具体的にどんな役割を果たしているのか，といったことをたえず問い直していかなければならないことを指摘している。

カリキュラムの編成を意図して学習指導要領の内容を吟味する視点の中核は，系統的な学習を効果的に実現させていこうとするところにあると考えられる。柴田（2000）が，教科の系統的学習とは，子どもの学習する内容が前後に論理的なつながりをもち，前に学んだことが後の学習の基礎として役立ち，後で学ぶことが前に学習した内容の発展として一段一段とより高い認識に子どもが高まっていくような学習のあり方をいうとし，教科学習の系統性が成り立つためには，内容の論理的な結びつきとともに，子どもの認識能力の発達に合わせた順次性を考慮することが必要と述べている。このことから，カリキュラムを編成するにあたり，次のような検討が必要となろう。まず，教科の目標や身に付けさせる資質・能力，具体的に取り扱う指導内容等が示されている学習指導要領を活用し，子どもの認識の面に焦点をあてて，何を学ばせるのかを吟味するという作業である。続いて，前後（学年間）のつながりやその順次性を検討することである。

現在作成し使用されている体育や保健の単元名が記された年間指導計画は，あくまでも何月にどの単元を何時間程度で実施するのかを整理したものである。そのため，年間指導計画はカリキュラムを具体的に実施していくための補完的な役割を果たすものであり，カリキュラムそのものの役割を果たすものではないという認識に立つところから教科カリキュラムの編成に取りかかる必要があると考えられる。

### （２）研究の目的と方法

本研究は，各小中学校の体育科・保健体育科におい

て一般的に作成されていると思われる年間指導計画はカリキュラムの機能を果たすものではないという認識のもと，体育科・保健体育科における学習指導要領を効果的に機能させる役割を果たすことのできる教科カリキュラム編成に関する考え方を提示することが目的である。

そのため，まず各小中学校で作成し使用されている体育科・保健体育科の年間指導計画を収集し，その実態を調査する。ここでは，教科カリキュラムとしての機能を果たすという観点からその問題点を検討する。合わせて，導出した問題点の改善について検討することを通して教科カリキュラムを編成する際の留意点を見出す。

次に，年間指導計画の問題点を改善するという観点から教科カリキュラムを編成するための考え方を整理する。

そして，整理したカリキュラム編成の考え方に従って，体育と保健の具体的な内容を取り扱い体育科・保健体育科における教科カリキュラム編成の事例的検討を試みる。

## ２．学校における体育科・保健体育科の年間指導計画の実状と問題点

本項では，各学校において作成されている体育科・保健体育科のカリキュラムとして認識されていると考えられる年間指導計画を収集し，その実状に言及し，次のような観点から問題点を検討する。一つ目は学習指導要領を効果的に機能させるカリキュラムとしての役割を果たすという観点からである。二つ目は，それらの年間指導計画からどのような情報を得て授業実践に活用されるのかという観点からである。

小学校及び中学校の年間指導計画は，次のような手続きによって収集した。分析は小学校ごと，中学校ごとのまとまりにおいて行った。

＜収集時期＞
令和２年 10～11 月
＜収集対象＞
静岡県内 K 地区に所属する小学校 19 校及び中学校 12 校
＜収集方法＞
研究の趣旨についての説明を文書及び地区の授業研究会において行い，収集を依頼した。承諾いただけた学校からデータで提出していただくようにした。
＜分析方法＞
小学校の体育科年間指導計画と中学校の保健体育科年間指導計画のまとまりにおいてその特徴を捉えることからどのように作成されているか考察する。また，どのような情報が得られ，授業実施に際してどのように活用されるものなのかについて考察する。そして，学習指導要領を効果的に機能させるカリキュラムの役割という観点から，その問題点を整理する。これらのことについて体育科教育学を専門とする大学教員を含む大学教員２名と小学校所属の現職教職大学院生１名と中学校所属の現職教職大学院生１名の計４名によって検討を行った。

年間指導計画の収集依頼の結果，小学校からは 18 校分が収集された。小学校 18 校のうち１校は，体育科指導の考え方がまとめられたものであったため，本調査の分析対象からは除外し，小学校は 17 校の年間指導計画を分析の対象とすることとした。また，中学校からは 11 校分が収集され，これらを分析の対象とした。

### （１）小学校体育科年間指導計画の実状

表１は，収集した小学校の体育科年間指導計画例を示したものである。

分析の対象とした小学校の体育科年間指導計画は，６学年分の計画がまとめられたものがほとんどであった。１校については，学年ごとのシートに分けられ，それぞれ全教科の単元名が並べられているものであった。これらの年間指導計画には，それぞれの学年ごとに４月から３月までの期間において，月ごとにいくつかの単元名が記載されていることが確認された。学習指導要領を基準とした教科カリキュラムの編成という観点から見ると，学習指導要領を基準にしていると捉えることができるのは単元名の部分ということになる。

このような年間指導計画は，次のような手順で作成されていると考えられた。

・学習指導要領において取り扱う内容として示されている運動領域の運動種目や保健領域の内容項目を取り出す。
・それぞれの単元に対しておおよその時間数を割り当てて年間を見通して配置する。

また，運動領域に関する単元の配置の仕方は，各校における運動会等の行事や地区の記録会等の時期に対応させていることが想定された。

これらの年間指導計画から得られる情報は，各学年において，何月ごろにどの単元を実施するのかということである。体育科の授業を実施する際の活用という視点で見てみると，次のような流れが想定された。

・年間指導計画によって，どの単元を実施するのかを確認する。
・その単元では具体的にどのような内容を取り扱うのかを学習指導要領で確かめて授業計画を検討する。
・その授業計画に基づいて授業を実施する。

### （２）中学校保健体育科年間指導計画の実状

表２は，収集した中学校の保健体育科年間指導計画

表１　小学校の体育科年間指導計画（例）

| | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 1 | 2 | 3 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | たのしくあそぼう<br>走② 跳①<br>固定施設、鉄棒③<br>鬼遊び② | 表現遊び⑦、リズム遊び④ | 固定施設、鉄棒を使った運動遊び⑥<br>鬼遊び⑤ | 水に慣れる遊び、浮く・もぐる遊び⑪ | | ボール投げゲーム⑧ | ボール投げゲーム④<br>走の運動遊び⑤ | マットを使った運動遊び⑦<br>跳び箱を使った運動遊び⑦ | 多様な動きをつくる運動遊び⑥<br>跳の運動遊び④ | 体ほぐしの運動④ | 走の運動遊び⑤<br>ボールけりゲーム④ | ボールけりゲーム⑦ |
| 2 | 多様な動きをつくる運動遊び②<br>固定施設、鉄棒を使った運動遊び⑤ | 表現遊び⑦、リズム遊び④ | 固定施設、鉄棒を使った運動遊び⑥<br>鬼遊び⑤ | 水に慣れる遊び、浮く・もぐる遊び⑪ | | ボール投げゲーム⑧ | ボール投げゲーム④<br>走の運動遊び⑤ | マットを使った運動遊び⑦<br>跳び箱を使った運動遊び⑦ | 多様な動きをつくる運動遊び⑥<br>跳の運動遊び⑥ | 体ほぐしの運動⑥ | 鬼遊び④<br>走の運動遊び⑤ | ボールけりゲーム⑦ |
| 3 | 体ほぐしの運動、多様な動きをつくる運動③<br>リレー⑤ | 表現、リズムダンス⑬ | 鉄棒運動⑦<br>（A案）<br>保健①<br>（育ちゆくからだとわたし）<br>（B案）保健①<br>（毎日の生活と健康） | 水泳⑪ | | ネット型ゲーム⑩ | 小型ハードル走⑤<br>幅跳び、高跳び⑦ | マット運動⑦<br>跳び箱運動⑥ | ベースボール型ゲーム⑧<br>（A案）<br>保健①<br>（育ちゆくからだとわたし）<br>（B案）<br>保健①<br>（毎日の生活と健康） | 体ほぐしの運動、多様な動きをつくる運動④<br>（A案）<br>保健①<br>（育ちゆくからだとわたし）<br>（B案）<br>保健①<br>（毎日の生活と健康） | 体ほぐしの運動、多様な動きをつくる運動②<br>ゴール型ゲーム⑥ | ゴール型ゲーム⑥ |
| 4 | 体ほぐしの運動、多様な動きをつくる運動③<br>リレー⑤ | 表現、リズムダンス⑬ | 鉄棒運動⑦<br>（A案）<br>保健①<br>（育ちゆくからだとわたし）<br>（B案）保健①<br>（毎日の生活と健康） | 水泳⑪ | | ネット型ゲーム⑩ | 小型ハードル走⑤<br>幅跳び、高跳び⑦ | マット運動⑦<br>跳び箱運動⑥ | ベースボール型ゲーム⑧<br>（A案）<br>保健①<br>（育ちゆくからだとわたし）<br>（B案）<br>保健①<br>（毎日の生活と健康） | 体ほぐしの運動、多様な動きをつくる運動④<br>（A案）<br>保健①<br>（育ちゆくからだとわたし）<br>（B案）<br>保健①<br>（毎日の生活と健康） | 体ほぐしの運動、多様な動きをつくる運動②<br>ゴール型ゲーム⑥ | ゴール型ゲーム⑥ |
| 5 | （A案）<br>短距離走・リレー⑤<br>体ほぐしの運動③<br>（B案）<br>ハードル走⑤<br>体ほぐしの運動③ | 表現⑩<br>（フォーク4、表現6） | 体力を高める運動④<br>（A案）<br>保健③（病気の予防）（B案）<br>保健③（心の健康） | 水泳⑪ | | ソフトバレーボール⑧ | （A案）<br>走り幅跳び⑥<br>（B案）<br>走り高跳び⑥ | （A案）<br>マット運動⑥<br>跳び箱運動⑧<br>（B案）<br>マット運動⑥<br>鉄棒運動⑧ | ティーボール⑦<br>（A案）<br>保健③（病気の予防）<br>（B案）<br>保健③<br>（心の健康、けがの防止） | 体ほぐしの運動・体力を高める運動④ | （A案）<br>サッカー⑤<br>保健②（病気の予防）<br>（B案）<br>バスケットボール⑤<br>保健②<br>（けがの防止） | （A案）<br>サッカー⑤<br>（B案）<br>バスケットボール⑤ |
| 6 | （A案）<br>短距離走・リレー⑤<br>体ほぐしの運動③<br>（B案）<br>ハードル走⑤<br>体ほぐしの運動③ | 表現⑩<br>（フォーク4、表現6） | 体力を高める運動④<br>（A案）<br>保健③（病気の予防）（B案）<br>保健③（心の健康） | 水泳⑪ | | ソフトバレーボール⑧ | （A案）<br>走り幅跳び⑥<br>（B案）<br>走り高跳び⑥ | （A案）<br>マット運動⑥<br>跳び箱運動⑧<br>（B案）<br>マット運動⑥<br>鉄棒運動⑧ | ティーボール⑦<br>（A案）<br>保健③（病気の予防）<br>（B案）<br>保健③<br>（心の健康、けがの防止） | 体ほぐしの運動・体力を高める運動④ | （A案）<br>サッカー⑤<br>保健②（病気の予防）<br>（B案）<br>バスケットボール⑤<br>保健②<br>（けがの防止） | （A案）<br>サッカー⑤<br>（B案）<br>バスケットボール⑤ |

例を示したものである。

分析の対象とした中学校の保健体育科の年間指導計画を見てみると，小学校の年間指導計画と同様に，どの中学校の計画も３学年分がまとめられているものであった。また，４月から３月の期間で各月において週単位で扱う単元がわかるような形で記載されているものであった。学習指導要領を基準にして編成するという観点からすると，学習指導要領を基準にしていると捉えられるのは小学校と同様に単元名の部分ということになる。

このような年間指導計画は，次のような手順で作成されていると考えられた。

・学習指導要領において取り扱う内容として示されている体育分野の運動種目や保健分野の内容項目を取り出す。
・それぞれの単元に対しておおよその時間数を割り当てて年間を見通して配置する。

また，体育分野に関する単元の配置の仕方は，各校における行事等を考慮するとともに，各運動種目の特性における時期的な部分への対応も考慮されていることが想定された。その結果として，中学校の年間指導計画の特徴としてどの学校の計画にも，３学年を通して同じ時期に同じ領域の種目を取り扱う形の計画になっているという様相が見られた。

これらの年間指導計画から得られる情報は，何月の第何週にどの単元を扱っていくのかということである。そのため，授業の実施に際しては，小学校の計画の検討と同様に，次のような流れが想定された。

・年間指導計画によって，どの単元を実施するのかを確認する。
・その単元では具体的にどのような内容を取り扱うのかを学習指導要領で確かめて授業計画を検討する。
・その授業計画に基づいて授業を実施する。

### （３）教科カリキュラムの役割から見た年間指導計画の問題点

本研究において調査した小学校の体育科年間指導計画からは，運動領域も保健領域もその単元において何を学ばせるかを読み取ることはできない。また，小学校６年間を見通した時，同じ運動領域の種目をどの学年においても取り扱うというようなことは見えるものの，その中味がどのように分解され，どの学年で何が追究され，どのように積み重なっていくのかということを読み取ることはできない。

また，中学校の保健体育科年間指導計画からも，それぞれの運動種目や保健項目において具体的に何を学

表２　中学校の保健体育科年間指導計画（例）

| 学期 | 月 | 週 | 行事 | 第1学年 | | | 第2学年 | | | 第3学年 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 1 | 2 | 3 | 1 | 2 | 3 | 1 | 2 | 3 |
| 1学期 | 4 | 1 | 入学式・始業式 | 体育理論3 | 体つくり5 | | 体育理論3 | 体つくり6 | | 体育理論3 | 体つくり6 | |
| | | 2 | | | | | | | | | | |
| | | 3 | 遠足 | | | | | | | | | |
| | 5 | 4 | | 短距離走4 | | | 短距離走3 | | | 短距離走3 | | |
| | | 5 | 中間テスト | | | | | | | | | |
| | | 6 | | 陸上競技9（幅跳び） | | 保健分野5 | 陸上競技9（幅跳び） | | 保健分野5 | 陸上競技9（幅跳び） | | 保健分野5 |
| | 6 | 7 | | | | | | | | | | |
| | | 8 | | | | | | | | | | |
| | | 9 | | 球技9（ネット型） | | | 球技9（ネット型） | | | 球技9（ネット型） | | |
| | | 10 | 期末テスト | | | | | | | | | |
| | 7 | 11 | 中体連 | | | | | | | | | |
| | | 12 | | | | | | | | | | |
| | | 13 | 終業式 | ダンス4 | | | ダンス4 | | | ダンス4 | | |
| 2学期 | 9 | 14 | 始業式 | 身体つくり6 | | | 身体つくり6 | | | 身体つくり6 | | |
| | | 15 | 運動会 | | | | | | | | | |
| | | 16 | | 陸上競技6 | | | 陸上競技6 | | | 陸上競技6 | | |
| | 10 | 17 | 中間テスト | | | | | | | | | |
| | | 18 | | 球技10（ベースボール型） | | 保健分野6 | 球技10（ベースボール型） | | 保健分野6 | 球技10（ベースボール型） | | 保健分野6 |
| | | 19 | 稲刈り | | | | | | | | | |
| | | 20 | | | | | | | | | | |
| | 11 | 21 | 合唱コンクール | | | | | | | | | |
| | | 22 | | | | | | | | | | |
| | | 23 | 期末テスト | 武道8 | | | 武道8 | | | 武道8 | | |
| | | 24 | | | | | | | | | | |
| | 12 | 25 | | | | | | | | | | |
| | | 26 | | | | | | | | | | |
| | | 27 | 終業式 駅伝 始業式 | 器械運動（マット） | | | 器械運動（跳び箱） | | | 器械運動（マット） | | |
| 3学期 | 1 | 28 | | | 9 | 保健分野5 | | 9 | 保健分野5 | | 9 | 保健分野5 |
| | | 29 | | | | | | | | | | |
| | | 30 | | 球技9（ゴール型） | | | 球技9（ゴール型） | | | 球技9（ゴール型） | | |
| | 2 | 31 | | | | | | | | | | |
| | | 32 | 学年末テスト | | | | | | | | | |
| | | 33 | 修学旅行 | | | | | | | | | |
| | 3 | 34 | 公立入試 | 器械運動 | | | 器械運動 | | | 身体つくり | | |
| | | 35 | 修了式・卒業式 | | 7 | | | 7 | | | 7 | |

ぶのか，そしてその学ぶことが３年間においてどのように積み重なったり関連づけられたりしていくのか読み取ることはできない。

このような年間指導計画が授業実践において活用されるのは，いつどの単元を取り扱うのかという確認である。そのため，授業計画を立てるときになってあらためて学習指導要領の内容を読むというような状態になっていることが予想される。そこでは，該当する部分のみの確認に留まり，小中９年間の中での位置づけを意識することや前の学年や次の学年との関連について意識することもないまま，学習指導要領の内容に従って授業を実施することとなる。運動領域・体育分野では，学習指導要領の指導内容というよりは，どの学年においても種目としての形を完成させることが意図される。その影響により運動種目そのものが目的となり，実践の結果として，種目の経験はするが，教科の学習として何を学んだのかは不明確なままとなっている可能性が考えられる。また，保健領域・保健分野でも同様に，それぞれの保健項目の内容が目的となり，教科書に書かれている内容を様々な手段で伝達することが主眼となり，教科の学習として何を学んでいるのかは不明確なままとなっている可能性が考えられる。

学習指導要領に提示されている内容は，もちろん各学年の発達段階に応じることを企図したものになっている。しかしながら，各学校のカリキュラムを編成することの基準となるように，多くの情報が盛り込まれているものであり，提示されていることをそのまますべて行うというようなものではない。つまり，各学校の実態に応じて示されているものではないということである。

学習指導要領に示されている運動領域や体育分野の各学年の内容をそのまま行おうとすると，実際の子どもたちの実態とはかけ離れていることが多くなると考えられる。そのような状況にあっても，学習指導要領の内容そのものを目標とし，前の学年で学んだことや次の学年で学ぶこととの関連が意図されることなく，どの学年においても同じような活動の仕方による種目そのものの実施を繰り返しているというような状態に陥っていることが想定される。大貫（2018）が，「運動種目＝教材＝学習内容」という考え方が根強くあり，改訂された学習指導要領においても，運動種目を教えるという考え方は踏襲されていると述べ，種目そのものが授業の目的になってしまう実態を指摘している。種目の経験はするものの，何を学んだかは曖昧なまま進んでいってしまうことへの問題提起である。この問題提起は，学習指導要領にそのように示されているということではなく，教科における体育の学習を実現するために運動種目を手段として利用するという解釈をしていくことが重要であることを示唆していると考えられる。運動種目を活用した体育学習を実現していくためには，何を学ばせるのかという観点から運動種目を分解して，具体的に学習対象となる内容を抽出することが必要となる。

保健領域や保健分野においては，学習指導要領の内容をどのように取り扱うのかということではなく，教科書に示されている内容そのものが目的となってしまう実状が予測される。そのため，健康や安全に関する様々な内容を取り扱うことは扱うが，扱う内容に関わる学びというより，活動を行うことや身近な生活に繋げることに意識が向いているという状態があるのではないだろうか。今関（2017）が，注意しなければならないことは，経験をすることや活動を行うこと，日常生活で実践できることのみに焦点を当てることが保健の学習の目的・意義なのではなく，保健の科学的認識に基づく習慣や行動の基礎を学ぶことであると指摘している。教科における保健の学習を実現していくために保健の内容を活用していくという見方をしていくことが重要であることを示唆していると考えられる。

以上のことから，小学校体育科年間指導計画も中学校保健体育科年間指導計画も，その名称の通り何月にどの単元を取り扱うかの計画表であり，教科カリキュラムとしての役割を果たすという観点で見つめ直してみると不十分であると考えることが妥当と思われる。教科カリキュラムは，学習指導要領の内容を効果的に機能させる働きを担うものと捉えることからすれば，学習指導要領の内容を解釈し，具体的に何をどのような順番で学ばせていくのかを意図したカリキュラムの編成を行うことに取り組む必要性が考えられた。年間の見通しを持って授業実践を進めていくためには年間指導計画は必要なものであるが，系統的な学びの具体的な実施を補助するものとしての役割を果たすものという認識に変えていくことが必要である。

以上のように，学びの系統性を意図した教科カリキュラムを編成していくためには，学習指導要領の内容について何を学ぶのかという視点から解釈していくことが必要であると捉えられた。

## ３．体育科・保健体育科の教科カリキュラム編成の考え方

本項では，小中学校の体育科・保健体育科の年間指導計画の調査を通して検討したことを土台として，教科カリキュラム編成の考え方を検討する。

カリキュラムは学習指導要領を基準にして編成するものということから，まずは，記載されている内容の読み込みが必要となる。どのような内容が示されているのかということを読みながら，それはどのような意味なのか，あるいはどのような意図があるのか等について解釈していくこととなる。改訂された学習指導要領には，「各学校においては，育成を目指す資質・能力の系統を踏まえ，『何を教えるのか』とともに，『どのように指導するか』を整理し，学習を進めることが求められる」ことが示されていることからも，学習指導要領を読み込んでその内容を解釈していく際の視点の中心は，学習対象を明確にすることと考えられる。今関（2018）が，学習指導要領に示された「見方・考え方」の内容を捉え，体育分野の「価値や特性」と保健分野の「原則や概念」が子供たちから見た学習内容として位置付いており保健体育科としての固有性を打ち出していると述べているように，「何を教えるのか」という学習対象を捉える枠組みは，「運動の価値や特性」「健康や安全に関する原則や概念」とおさえられよう。

運動領域・体育分野における「運動の価値や特性」という文言には曖昧さが見られるため，その対象となるものは何なのかということをもう少し明確に捉えておく必要がある。大貫（2018）は，体育科で学ばせる教科内容について「運動文化に関する科学の根幹をなす基本的概念や原理としての知識や技能の体系」とおさえている。岩田（2002）は，学習内容を構成する要素として，スポーツに関する知識（概念や法則）・認識（感覚的・論理的認識），技術・戦術やルールやマナー，練習やゲームの組織・運営の仕方，さらにこれらの学習方法（学び方）をあげている。今関（2017）は，知識として学習内容を位置付けており，「事実，記号，名称，絵，映像，擬音語，原理，原則，考え，概念など」をあげている。教科内容のレベルで捉えたり実践場面に近い学習内容のレベルで捉えたりしていることの違いはあるにせよ，学習対象となる「運動の価値や特性」は，運動に関する概念や法則をその中核に捉えることが妥当と考えられる。しかしながら，小

学校低・中学年においては，発達段階からすれば運動に関する概念や法則を追究することは難しい。そのため，概念や法則を直接的に追究していくこととなるのは小学校高学年以降となる。低学年は運動遊びを通して体を動かすことの楽しさを味わったり，自然と体の動かし方や使い方等を高めたりする。中学年は多様な運動種目に取り組み，どのような種目なのか知る。そうして，高学年以降では，それぞれの領域の種目に関する運動の仕組みに着目して具体的に追究していくことでよいと思われる。

以上のように考えれば，運動種目そのものを目的として各学年の発達段階に応じて取り扱っていくというような見方ではなく，運動種目を分解して小学校から中学校までの９年間を使って分析していくことが教科体育の系統的な学びの枠組みとなる。このようなことが，縦への系統性を見通したカリキュラム編成の足場となり得ると考えられる。

保健領域・保健分野の学習対象は「健康や安全に関する原則や概念」と明確に示されているが，具体的な内容は何になるかを十分検討していく必要があると思われる。系統的な学びという観点において，保健教育の手引き（2019，2020）に示されている保健における体系イメージを参考にして整理することが可能である。小学校では「実践的な理解」が求められる。そのため，健康や安全に関する事実や事象を理解することが直接の目的になる。中学校では「科学的な理解」が求められるため，健康や安全に関する事実や事象に含まれている「健康や安全に関する原則や概念」を抽出し，その理解を深めていくことが目的となる。このように健康や安全に関する事実や事象そのものを理解する小学校段階を経て，その事実や事象の中にある原則や概念に着目して理解を深める中学校段階へと展開していくことが，教科体育における保健の系統的な学びの枠組みとなると考えられる。

運動領域・体育分野においては，種目をどのように行うのかというような考え方から，種目を活用して教科の体育学習を実現させていくという考え方への転換が必要である。同様に，保健に関する内容をどのように取り扱うのかというような考え方から，保健に関する内容を活用して教科の保健学習を実現させていくという考え方への転換が必要である。

## ４．カリキュラム編成の事例的検討

教科カリキュラム編成の考え方の整理に基づいて，具体的な内容を使って，事例的にカリキュラムの編成を試みる。

### （１）運動領域・体育分野におけるカリキュラム編成（陸上領域を対象に）

陸上運動領域のリレーの単元を通して，何をどのような順番で学んでいくのかということの検討を行い，事例的に系統的な学びの構築を試みる。系統的な学びの構築においては，リレーという種目について小中学校９年間を使って分析していくという考え方を土台とする。学年ごとのリレーの行い方に着目するのではなく，学習指導要領の内容を活用して，リレーについて何を学ばせるのかを抽出し，子どもの発達段階を考慮して，その内容を効果的に学んでいくことのできる順番を検討するということとなる。

図１は，陸上運動系のリレーを対象にして事例的に検討した小中９年間を見通した系統的な学びのカリキュラム編成を示したものである。

まずは，リレー種目において子どもたちが追究（学習）していく内容は何になるのかという視点から運動の仕組みへの着目が必要である。学習指導要領にはどの学年の内容を見てもバトンパスに関する記載が見られることから，バトンパスに着目して，その仕組みの抽出を検討することになる。バトンパスの仕組みとして学習させること，すなわち子どもたちに理解を深めさせていく価値のある内容は，「利得タイムの創出とその原理」となろう。しかしながら，運動の原則や概念を直接的に追究していくことが可能となるのは，小学校高学年から中学校ごろと考えられる。そのため，小学校低学年はリレーという種目に出会い，リレーの行い方を理解する。小学校中学年は，リレーのバトンパスに着目させ，走りながらバトンの受渡しを行うことによるバトンの移動の様子に着目する。小学校高学年においては，走りながらバトンの受渡しを行う際のバトンの移動するはやさの追究をする。中学校においては，バトンパスにおける利得タイム創出の事実を知り，なぜ利得タイムが生み出されるのか，その原理を追究する。そして，利得タイム創出の原理の理解を深めることと合わせて利得タイムの実現に取り組んでいくこととなると考えられる。

### （２）保健領域・保健分野におけるカリキュラム編成（喫煙・飲酒・薬物乱用を例に）

小学校保健領域の「病気の予防」と中学校保健分野の「健康な生活と病気の予防」の単元を通して，何をどのような順番で学んでいくのかということの検討を行い，事例的に系統的な学びの構築を試みる。系統的な学びの構築の枠組みとして，文部科学省から発行されている保健教育の手引き（2019，2020）に示されている保健教育の体系イメージを活用していく。これは，小学校から高等学校までを見通して学びの系統を整えていくフレームワークとして，各段階の特徴を適切に捉えていると考えられたからである。カリキュラムの事例的編成に取り扱う内容は，「喫煙」「飲酒」「薬物乱用」とした。

図２は，保健領域・保健分野の喫煙，飲酒，薬物乱

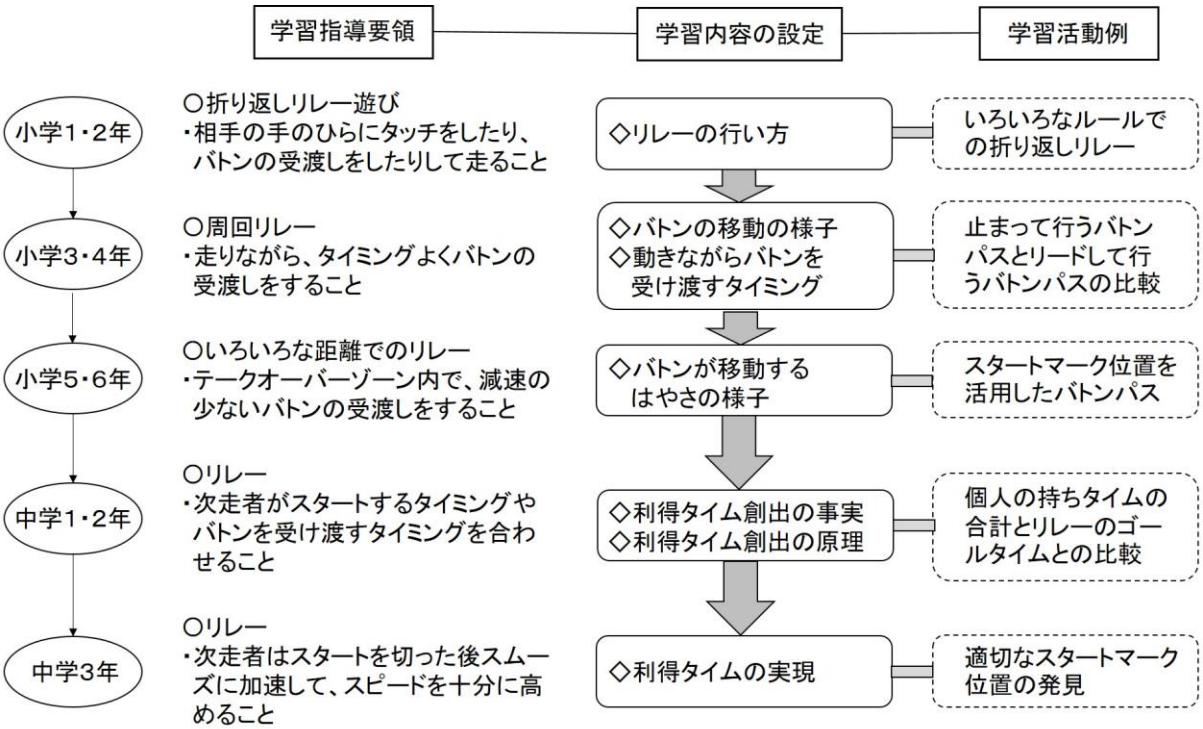


図１　運動領域・体育分野の陸上・リレーを対象としたカリキュラム編成の事例

用の内容を対象として，小学校と中学校の連係を意図した系統的な学びのカリキュラム編成を示したものである。

小学校は「より実践的な理解」が示されており，小学校段階においては，喫煙・飲酒・薬物乱用によって引き起こされる心身への害を理解する。中学校は「より科学的な理解」が示されており，喫煙・飲酒・薬物乱用に関する内容において，「健康や安全に関する原則や概念」を抽出することが必要となる。今回の検討では，「依存」に着目する。喫煙・飲酒・薬物乱用の内容を活用して依存という概念に着目し，人の心や体の働きにおける依存とはどのようなものなのかの理解を深めていくこととなる。小学校では，喫煙・飲酒・薬物乱用において害があるということを理解している。このことに対して，そのようなことが分かっていながらやめられない理由を考えることから依存に着目させることが可能と考えられる。この段階で着目した依存は子どもたちの認識ではあまりよい印象ではないだろう。しかしながら，自分や仲間にも実は依存していることがあるということを考えることによって，依存ということを身近なものと捉えることとなり，認識の変容が起こると思われる。そうして，依存という概念の理解を深めていくこととなる。高等学校は「総合的な理解」が示されており，理解を深めた「依存」というツールを活用して，社会生活における健康に関する様々な事象についての現状を捉え課題を見出していくような学習への発展が考えられる。

## ５．カリキュラム・マネジメントへの対応

前項で体育科・保健体育科の教科カリキュラムの事例的検討を行った。運動領域・体育分野では，種目ごとに「何を学ばせるのか」の具体的な内容の抽出に基づいて縦への系統的な学びの検討が必要であることが捉えられた。また，保健領域・保健分野でも，内容ごとに「健康や安全に関する原則や概念」の具体的な内容の抽出に基づいて縦への系統的な学びの検討が必要であることが捉えられた。

しかしながら，カリキュラム編成の困難さも浮き彫りにされたと考えられる。運動領域・体育分野においては，いくつかの領域があり，さらにはいくつもの運動種目が示されている。同様に保健領域・保健分野においても健康や安全に関する多様な内容が示されている。それらのひとつひとつについて「何を学ばせるのか」の具体的な内容を検討しカリキュラムを編成していくことが必要と考えられるからである。そのため，すべてについて一度に検討して実施していこうとする

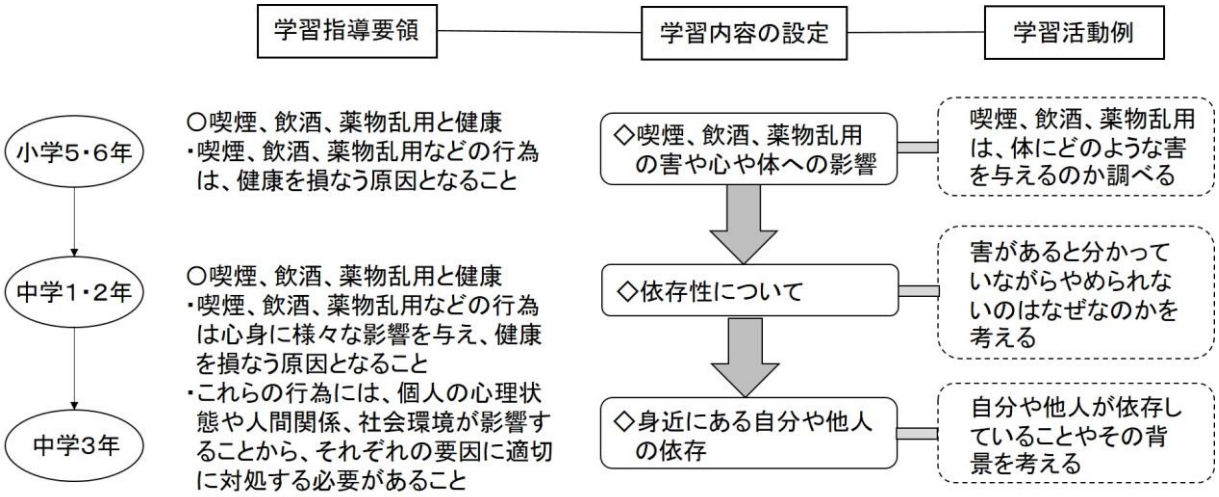


図２　保健領域・保健分野の喫煙・飲酒・薬物乱用の内容を対象としたカリキュラム編成の事例

のではなく，例えば，今年度はこの領域に着目して詳細に検討し，次年度は違う領域に着目して検討を行っていくというような進め方はどうであろうか。その際前年度までに検討して実施された内容については，学ばせる内容は学校の子どもたちの実態に合っているか，その順番は適切かどうか等の評価を行い改善を検討していくことは可能と考えられる。

何をどのような順番で学ばせるかの意図的な実践に伴い，何をどのように実現できたのかを評価し，よりよくするための改善に取り組んでいくとするならば，やはり，運動の種目名や保健の項目名だけが記載されている年間指導計画では，評価し改善していくことの対象が明確に設定されていないため困難があると考えられる。前項において検討し事例的に編成した体育と保健のカリキュラムは，体育であれば，同じ種目内において，何をどのような順番で学んでいくのかが示されている。保健であれば，健康や安全に関する内容に含まれる原則や概念を具体的に位置づけ，その理解を深めていくことが示されている。その内容と学ぶ順番を対象に適切かどうかの評価を行っていくことができる。このようなことが各学校において求められるカリキュラム・マネジメントの基本的な枠組みとなるものと考えられる。

このカリキュラム・マネジメントについて，学習指導要領解説総則編（2017）には，以下のように示されている。

児童生徒や学校，地域の実態を適切に把握し，教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくことと，教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと，教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して，教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと。

カリキュラム・マネジメントで重要なことは，カリキュラムの実施に対して，評価を行い改善するというサイクルを整え実行していくことである。ところが，カリキュラム・マネジメントの側面として示された，教科等横断的な視点で組織的に配列すること，の部分にばかり視点が注がれ，あたかも教科横断的に仕組むことがカリキュラム・マネジメントであるかのような偏った捉え方がされているのが実際のところであろう。金馬（2019）は，カリキュラム・マネジメントとは，各学校が教育目標のよりよい達成のために，カリキュラムを創り，動かし，よりよいものへと変えていく営みであると述べ，評価の重要性が強調された理由を次のように指摘している。

授業研究を通した本時レベルの評価のレベルの高さに比べ，長期的な年間単位のカリキュラム評価は長年不活発であったことから学校における評価が義務化され，意識されるようにはなった。しかし，形骸化やアンケート主義，構造化されていない網羅的な評価項目等，多くの課題が指摘されてきた。これらのことに対応するべく，改訂された学習指導要領において，カリキュラムの目標・内容・組織・実践と諸条件を改善するために，評価の重要性が強調されたのである。

今関（2018）も，中央教育審議会答申に示されている，各学校におけるカリキュラム・マネジメントの確

立について，各学校には，学習指導要領等を受け止めつつ，子供たちの姿や地域の実情等を踏まえて，各学校が設定する学校教育目標を実現するために，学習指導要領に基づき教育課程を編成し，それを実施・評価し改善していくことが求められる，というところに着目し，カリキュラム・マネジメントとは，教育課程を実施・評価し改善していくことであることを強調していると捉えている。

## ６．まとめ

本研究では，まず体育科・保健体育科のカリキュラムとして認識されていると考えられる年間指導計画の実態の調査を行った。各学年において何月にどの単元を取り扱うのかという情報を得るものとしての活用はできるものの，運動種目や保健項目において何を学ばせるのかということを捉えることができるものではないことが確認された。また，運動領域・体育分野の同一種目における学年間の学習内容の系統について見出すことができなかった。同様に，保健領域・保健分野の同じ内容項目における学年間の学習内容の系統について見出すことができなかった。学習内容が不明瞭なため，このような年間指導計画の活用においては，運動種目そのものを目的としたり，教科書にある保健の内容そのものを目的としたりする授業実践に陥っている可能性が考えられた。これらのことから，現状の体育科・保健体育科の年間指導計画は，学習指導要領を効果的に機能させるカリキュラムの役割を果たすものではなく，カリキュラムの実施を補助するものとしての位置づけであるとの認識に立つ必要が考えられた。そのため，教科カリキュラムの編成においては，学習指導要領の内容を解釈することに関して，何が学習対象となるのかを具体的に取り出し，発達段階に応じた学びを考慮しながら学年間の系統を意図して明確に位置づけていくことの必要性が捉えられた。

本研究においては，運動領域・体育分野では陸上のリレーを対象に，カリキュラムの編成の事例的検討を行った。学習対象となる「運動の価値や特性」として運動の仕組みに着目し，その内容を具体的に抽出し，学年の発達段階を意図して学習内容を設定した。保健領域・保健分野では喫煙，飲酒，薬物乱用を対象に，カリキュラム編成の事例的検討を行った。学習対象となる「健康や安全に関する原則や概念」に着目し，その内容を具体的に抽出し，学年の発達段階を意図して学習内容を設定した。

何をどのような順序で学ばせていくのかを具体的に設定したカリキュラムを作成することにより，その内容や順番は適切だったのかを評価し改善していくことが可能となり，カリキュラム・マネジメントを実施する基本的な枠組みとおさえられた。

本研究では，カリキュラム編成の事例的検討を行ったが，他の運動種目や保健項目においての具体的な検討を進めることによって，学習指導要領を効果的に機能させるよりよい教科カリキュラムの構築に取り組んでいくことが今後の課題となろう。

## 文献


・文部科学省（2017）：小学校学習指導要領解説 体育編，東洋館出版社
・文部科学省（2017）：中学校学習指導要領解説 保健体育編，東山書房
・文部科学省（2017）：小学校学習指導要領解説 総則編，東洋館出版社
・文部科学省（2017）：中学校学習指導要領解説 総則編，東山書房
・長尾彰夫（1989）：指導要領の改訂とカリキュラム，新カリキュラム論，長尾彰夫著，有斐閣，pp. 1-13
・長尾彰夫（1989）：指導要領の果たしている役割，新カリキュラム論，長尾彰夫著，有斐閣，pp. 68-78
・原清治（2005）：総論－教育課程の今日的課題，学校教育課程論，原清治編著，学文社，pp. 1-10
・柴田義松（2000）：教科書の系統性，教育課程－カリキュラム入門，柴田義松著，有斐閣，pp. 168-173
・大貫耕一（2018）：協同・探究の授業づくり，体育科教育５月号，大修館書店，pp. 62-64
・今関豊一（2017）：教育課程における保健の変遷，保健科教育法入門，日本保健科教育学会編，大修館書店，pp. 20-21
・今関豊一（2018）：中学校保健体育科における「見方・考え方」，平成 29 年改訂中学校教育課程実践講座保健体育，今関豊一編著，ぎょうせい，pp. 17-20
・岩田靖（2002）：体育科の教科内容論，体育科教育学入門，髙橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編著，大修館書店，pp. 65-72
・大貫耕一（2018）：体育における教科内容の混乱，体育科教育６月号，大修館書店，pp. 62-64
・今関豊一（2017）：教科等間・学校段階間のつながり，平成 29 年改訂中学校教育課程実践講座保健体育，今関豊一編著，ぎょうせい，pp. 242-246
・文部科学省（2019）：保健教育の推進とカリキュラム・マネジメント，小学校保健教育参考資料改訂「生きる力」を育む小学校保健教育の手引き，pp. 6-11
・文部科学省（2020）：保健教育の推進とカリキュラム・マネジメント，中学校保健教育参考資料改訂「生きる力」を育む中学校保健教育の手引き，pp. 6-11
・金馬国晴（2019）：教育課程行政からカリキュラム・マネジメントへ，カリキュラム・マネジメントと教育課程，金馬国晴編著，学文社，pp. 42-58